戸崎宏正著

仏教認識論の研究　上巻

長崎法潤

近年、因明すなわち佛教論理学の研究には目ざましい成果が見られる。佛教論理学を代表する陳那の主著 Pramāṇasamuccaya は、サンスクリット原典が散逸し、漢訳も伝えられておらず、チベット訳のみが現存する。そのチベット訳からの現代語訳が服部、北川両博士によってなされた。服部正明博士は、Pramāṇasamuccaya のうち認識論に関する問題が取扱われている第一章の英訳を Harvard Oriental Series から刊行し、北川秀則博士は論理学の問題が主に論じられている部分（第二、第三、第四、第六各章前段、及び第一、第二、第三章後段の一部）を和訳した（「インド古典論理学の研究」鈴木学術財団刊行）。これによって、佛教論理学において最も重要な位置を占める Pramāṇasamuccaya の主なる部分が解読研究され、その論理学体系の全貌が初めて明らかになった。

陳那の孫弟子になるダルマキールティ（Dharmakīrti 法称）は、最も偉大な佛教論理学の学僧である。彼の論理学に関しては、Nyāyabindu の研究によって早くから知られている。彼の主著は Pramāṇavārttika である。この論は、その問題の取扱いや説明の方法などの点では一つの独立した著述であるけれども、本来法称は、陳那の Pramāṇasamuccaya の註釈を目的にこの論を著わしたと言われている。Pramāṇavārttika は、

第一章　為自比量（svārthānumāna）
第二章　量成就（pramāṇasiddhi）
第三章　現量（pratyakṣa）
第四章　為他比量（parārthānumāna）

の四章から構成され、第一章（為自比量）にのみ法称の自註（svavṛtti）が附されている。この論のサンスクリット原典は、ラーフラ・サーンクリトヤーヤナによって一九三八年に刊行された。引続いて Manorathanandin の註釈、第一章の法称自註に対する Karṇakagomin の複註、Prajñākaragupta の註釈が出版された。また、第一章に対する法称の自註がインドのマルヴァニヤ（一九五九）とイタリーの Raniero Gnoli（一九六〇）によって出版された。これらのサンスクリット・テキストの出版によって、法称の研究は飛躍的に進展した。

戸崎宏正博士は、Pramāṇavārttika の現量章の研究に早くから着手され、昭和三七年以来、その和訳研究を次々と研究雑誌に発表してこられた。それを読ましていただき、筆者はたいへん啓発されるところがあった。今までの研究の成果を集大成したのが本書「佛教認識論の研究――法称著『プラマーナ・ヴァールティカ』の現量論――上巻」である。

本書は、「序論」（一～三二頁）、第一部「法称の思想的立場」（三三～五四頁）、第二部「Pramāṇavārttika 現量章の和訳研

究」（五五～四一三頁）から構成されている。まず「序論」の「一　法称の生涯と年代」においては、プトンの『佛教史』とターラナータの『インド佛教史』との伝える法称の伝記を紹介し、法称の出身地がデッカンであることを述べている。次に法称とクマーリラの関係について、先学の意見を紹介し、Pramāṇavārttika 現量章においても法称とクマーリラとの関係を示唆する箇所について述べ、法称がクマーリラの Ślokavārttika を知っていた、と記している。法称の年代に関しては、義浄の『南海寄帰内法伝』に法称の名が記されていること、法称が護法の弟子であったと伝えるターラナータの『インド佛教史』、玄奘が法称について言及していないこと、の三点から法称の年代決定が従来試みられている。S. Chandra Vidyabhusana, Rāhula Sāṅkṛtyāyana, D. Malvania, E. Frauwallner の年代推定を紹介し、最後に、玄奘がインドを去った年から義浄がインドを去るまでの間に法称が活躍したと推定する七世紀中葉説が学界の大勢であるが、決定説ではないと述べている。続いて「二　法称の著作」「三　Pramāṇavārttika の注釈書」では、著作、注釈書について詳しく述べられ、入門者にもたいへん参考になる。

第二部「法称の思想的立場」は三つの章から成り立っている。まず第一章「Pramāṇavārttika 現量章の構成」では、Pramāṇasamucayavṛtti 現量章と Pramāṇavārttika 現量章とを対応させながら現量章の構成を明らかにしている。それによって、構成の点から、最初から「量果＝量」までを論ずる立場と、最後の「量果＝自証」を説く立場との間に思想的に異るところのあることを指摘している。すなわち、前者は外境論説（経量部説）を中心にして論述され、後者の中には唯識説と経量部説と併説されている。

第二章「Pramāṇavārttika 現量章に見られる経量部説」では、現量章の思想的立場を明らかにするために、そこに見られる経量部説をとりあげ、法称の所説との関係を論じ、たいへん興味深い。まず第一節「所縁説について」において、「五識身は極微の積集を所縁とする」という法称の説が経量部説を採用していることを証明している。世親の『唯識二十論』に見られる外境論説に「極微の積集せるものが知の所縁である」という説があげられ、これが山口益先生によって経量部説であることが確められているが、それを論拠にして、「世親、陳那によって破せられたその説を採用したものといわざるをえない。」（三九頁）と述べられている。第二節「意識説について」では、知と対象との関係をとりあげる。知が対象を把握するといわれるのは、前刹那の対象が「知に（自己の）形相を与える能力のある因であることが（対象の）所取性である」（K. 247）という法称の所説が経量部説であることを明らかにしている。この偈は、Tattvaratnāvalī, Sarvadarśanasaṃgraha, Nyāyakaṇikā, Nyāyavārttikatātparyaṭīkā, Nyāyaviniścayavivaraṇa, Kāśikā に経量部説として引用されている。さらに Vedāntasūtra 第二編第二章第二五経に対する Rāmānuja の注釈、Sarvasiddhāntasaṃgraha の経量部を紹介する箇所にも言及さ

れている。また、法称の主張する「知・対象異時説」が『具舎論』に他派の説として記され、『光記』、『宝疏』では、その他派とは経量部であると記されている、と述べている。第三節「量果＝量」説について、では、量果を対象認識とみる法称の「量果＝量」説における、量が対象に相似していること、量果を対象知とする主張が、Manorathanandin 注の Vibhūticandra 書写本傍注、Pramāṇaviniścaya に対する Dharmottara の注、同じく Jñānaśrībhadra の注、Sarvadarśanasaṃgraha によって経量部説であることが証明される、と論じている。第四節「量果＝自証」説について、では、外境実在論に立った法称の「量果＝自証」説は、Pramāṇasamuccaya の論述にもとづき、経量部説であることを論証している。第五節「自証の証明について」においては、知の自証性を論証する論議の過程に、経量部説と言える論証が二つあることを指摘している。第六節「その他」では、「言葉の所詮について」と「現量の種不認識について」とに分けて、同じように経量部説を指摘している。一方では法称は唯識派の学匠であると言われながら、現量章の中に法称の主張として経量部説が見られ、経量部の考え方が現量章の根底にある理由について、第三章「Pramāṇavārttika における法称の思想的立場」において論じられている。そこで法称は世俗の立場から現量論を展開していることを指摘し、「このような法称の態度は、丁度中観派の清弁が世俗の事柄について経量部説に立ち、それゆえに経量部中観派と呼ばれることがあるのと帰を一にする」（五四頁）と述べ、「法称は個人的には唯識説を奉じながらも、方便としてのかれの現量論は経量部説にもとづいている」（五四頁）と結んでいる。

第二部「Pramāṇavārttika 現量章の和訳研究」は本書の中心になっている。現量章の構成によって、「一、現量の数」「二、現量の定義」「三、現量の名称」「四、阿毘達磨の所説と現量定義との会通」「五、現量の対象」「六、現量の種類」「七、似現量」「八、量果＝量」に分けられている。現量章は以上によって終るのではないが、本書で取りあげた「量果＝量」の論議まで（三一九偈）が外境論説に立ち、現量の論説として一応まとまったものである、と述べられている。すなわち、佛教論理学の現量章で取扱われる主題が「量果＝量」までで論じつくされている。

本和訳研究に関係した現量章の注釈は、(1) Devendrabuddhi の Pramāṇavārttikapañjikā（チベット訳）、復注—Śākyamati の Pramāṇavārttikaṭīkā（チベット訳）、(2) Prajñākaragupta の Pramāṇavārttikabhāṣya（梵文、チベット訳）、復注—Jina の Pramāṇavārttikālaṅkāraṭīkā（チベット訳）、Yamāri (Jamāri) の Pramāṇavārttikālaṅkāratīkāpariśuddhānāma（チベット訳）、(3) Ravigupta の Pramāṇavārttikaṭīkā（チベット訳）、(4) Manorathanandin の Pramāṇavārttikavṛtti（梵文、チベット訳）の中に含まれている。これらの注釈を使用して和訳し、解説を書いているが、とくに、Devendrabuddhi は法称の直弟子といわれるから、彼の注釈を最も重視し、注釈者の間に意見の相違がある場合は、Devendrabuddhi の意見によ

っている。それぞれの注釈書の特徴については三〇〜三二頁に詳しく述べられている。

法称の Pramāṇavārttika はたいへん難解な論である。それは、陳那の Pramāṇasamuccaya の註釈を目的にして書かれた論であるが、他学派との対論を踏えて議論を展開させている。そこで戸崎博士は現量章の和訳研究において、まず陳那の見解を説明し、常に Pramāṇasamuccaya の所説と対応させながら現量章の解説を行っている。さらに展開している他学派の対論に関しては、他学派の文献の中にその見解をあとづけようとしている。和訳は非常にわかりやすい。とくに詳しい解説によって偈の意味が理解できうるようになされ、そのうえ解説において議論における問題の所在が明確に示されている。

法称の現量については Nyāyabindu の英訳、和訳によって従来その内容を知ることができたが、Pramāṇavārttika の現量章に比べれば、全く短い簡潔なものである。戸崎博士の和訳研究によって、法称の主著である Pramāṇavārttika 現量章が初めて解読され、法称の現量についてその全貌をほぼ知りうるようになった。これは、佛教論理学研究における大きな貢献である。

本書の最後に和漢索引、サンスクリット索引、チベット語索引、翻訳を示した引用文献索引が付され、読者にとってたいへん便利である。

（昭和五四年一月　大東出版社刊、A5判　四一三頁　索引　六四頁　七、五〇〇円）

「佛教学セミーナ」バックナンバー発売中

既発行の「佛教学セミナー」のバックナンバーを御希望の方は，佛教学研究室又は文栄堂書店に申し込み下さい。二冊以上お申し込みの方には送料を当方で負担します（一冊のみの場合，送料40円）。

1〜7号	品切れ	20　号	品切れ(特集号)＊
8〜10号	250円	21〜24号	600円
11〜14号	300円	25〜31号	700円
15〜17号	350円	32　号	800円
18〜19号	400円		

＊第20号は特集号につき，別に単行本として文栄堂書店より発売中（4,000円）。
※既刊号の総目次は本誌26号に掲載されています。
9，12，14，22号は残部僅少です。